

産官学連携推進 News Letter

Vol. 6

「テクノメッセ東大阪展2025」に出展 情報デザイン学部 伊藤教授

2025年11月5日(水)・6日(木)の2日間、マイドームおおさかにて、「テクノメッセ東大阪展2025」が開催されました。本学は情報デザイン学部の伊藤教授による「高精度周波数解析システム、1/32スケールAI高速移動実験車両」を出展しました。本展示では、機械設備の振動異常検知・音響機器・生体信号など高精度化とリアルタイム解析が求められる分野への応用が期待される周波数解析システムとともに、3Dプリンタ技術やドローン技術・強化学習を応用した知能化実験を通じて、先進技術の小型化・高度化に向けた研究環境を紹介しました。

会期中は、製造業をはじめ、広告/サービス業、自治体、金融機関、大学、産業界など、幅広い分野から多くの来場者にお越しいただき、活発な質疑応答や意見交換が行われました。関西エリアにおいて本学の研究活動を広くアピールでき、研究成果の社会実装に向けた手応えを得ることができ、有意義な出展となりました。



「ORIST・MOBIO技術シーズ・研究成果発表会」に出展 情報デザイン学部 高井准教授

2025年12月5日(金)、大阪商工会議所にて「ORIST・MOBIO技術シーズ・研究成果発表会」が開催されました。本学は、情報デザイン学部の高井准教授による「生体計測データを用いた技術・技能継承支援システムの開発」を出展し、情報機器にて測定した生体データを利用した技術・技能継承支援システムを開発した事例紹介しました。

当日は、自治体、金融機関、公的機関、産業界、大阪市内・府下の製造業をはじめとする、幅広い分野から多くの来場者にお越しいただき、活発な質疑応答や意見交換が行われました。大阪府内において本学の研究活動を広くアピールでき、研究成果の社会実装に向けた手応えを得ることができ、有意義な出展となりました。



「大阪商工会議所 産学連携セミナー」にて、 本学における産学連携の取組みを紹介しました(2月19日)

2026年2月19日(木)、大阪商工会議所にて、「産学連携セミナー」が開催されました。本セミナーは、企業が抱える技術開発や研究、人材育成などの課題解決に向け、大学や公設試験研究機関との連携活用を紹介することを目的としています。本学からは、産学連携コーディネーターの中林が登壇し、大阪産業大学における産学連携の取組や支援体制、企業との連携事例を中心に紹介しました。当日は、企業、自治体、連携機関などから58名参加し、講演後の交流会で活発な議論が交わされました。

知財勉強会(特許法編)を開催しました(2月20日)

本学における知的財産活性化の取組の一環として、昨年度より勉強会を開催しています。研究成果を社会に還元するための知財文化の定着を目的に、今回は知的財産実務に精通した外部の専門家を講師として招き、先行特許調査および特許検索のコツについて、事例を交えながら丁寧に解説いただきました。参加者からは、「生成AIと特許の関わりや新規性喪失の盲点、拒絶通知に至るプロセスなどについて理解を深めることができた」との声が寄せられました。



次回開催のお知らせ
著作権法 (3月23日)
「大学における著作権等の扱い、共同研究で発生する著作権の扱い」

新産業研究開発センター(HRC)1階の産学交流会議室を仮稼働しました(2月19日)

本会議室は、「まず来て、見て、話す」ことができる場として、学内の研究者どうしの交流や学外の皆様との情報交換、研究成果の常時展示スペースとして活用します。さらに、産学連携交流会や各種セミナー、ワークショップ等の開催拠点としても活用していきます。

<展示会>研究シーズの展開

- | | |
|---------|-------------------|
| 2026年2月 | JST新技術説明会での研究成果発表 |
| 2026年3月 | MOBIOカフェでのシーズ発表 |
| 2026年3月 | 学内研究交流会 |
| 通年 | 研究室/ラボ訪問・ヒアリング |

<お問い合わせ・相談>
社会連携・研究推進センター
産業研究所事務室
sangaku@cnt.osaka-sandai.ac.jp

活動紹介

トピックス

今後の予定

学生目線での産学連携 — システム工学部 草場研究室インタビュー —

本学では、共同研究や展示会での技術発信、学会発表などを通じた産学連携の取り組みを推進しています。しかし、その価値が学生自身にどのように受け止められているのかを、直接聞く機会は多くありません。そこで今回、システム工学部の草場光博教授の研究室（光情報科学研究室）を訪問し、学会発表や大型展示会で説明員を務めた4回生2名にインタビューを行いました。

お話を伺ったのは、他大学大学院へ進学予定の田中利玖さんと、メーカーへの就職が内定している大歳丈翔さん。両名は、4回の学会発表や2025年1月に開催された「nano tech 2025(国際ナノテクノロジー総合展・技術会議)」(東京ビッグサイト)、同年10月の「CEATEC 2025」(幕張メッセ)に参加し、企業関係者へ研究内容を説明した経験を持っています。

企業と向き合い、研究の社会的意義を実感

展示会で企業関係者と対話した印象について尋ねると、大歳さんは次のように語ってくれました。

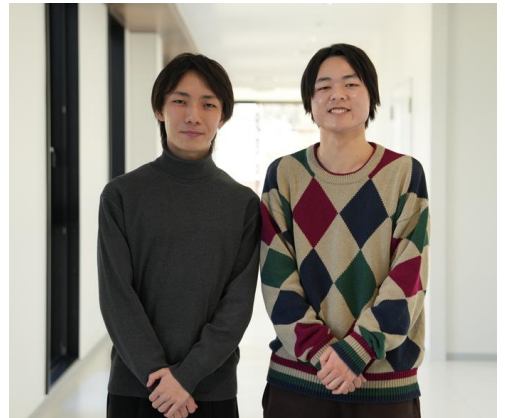
「最初は緊張しましたが、学生であることに関係なく、非常に専門的で踏み込んだ質問をいただきました。一研究者として対応いただけたことが印象的でした。」

田中さんも、

「自分たちが卒業研究の中で得られた実験結果が企業の課題解決につながる可能性を感じました。卒業研究ではシリコン太陽電池を対象として取り組んでいますが、企業の方との議論を通じて、他の固体材料にも応用できると気づき、研究の出口が広がりました。」

と振り返ります。

草場研究室では、材料表面にレーザーを使ってナノドット構造を形成させることで無反射性や撥水性などの新しい機能を付与する研究を行っています。学会発表や展示会は、学生がその成果を社会に向けて発信する貴重な機会となっています。



左) 田中さん、右) 大歳さん

学生が感じた産学連携の価値

産学連携に関わるメリットについて、大歳さんは次のように話します。

「社会が何を求めているのかを知ることができました。自分たちが“誰もやっていない研究”に取り組んでいるという実感が、卒業研究へのモチベーションにつながりました。」

田中さんは、

「企業は理論だけでなく実用化を重視しています。企業視点を知ったことで、研究を社会実装まで見据えて考えるようになりました。」

と述べ、大学院進学後も学術的な面と実用的な面の接点を意識して研究を深めたいと語ってくれました。



大歳さん

伝える難しさと成長

一方で、課題もあったといいます。

田中さんは、

「専門用語を使わず説明する難しさを痛感しました。日本語でわかりやすく伝えることは想像以上に難しかったです。」と率直に語ってくれました。

大歳さんは、

「専門用語の背景まで理解していれば、自信を持って説明できることを学びました。知識の“点と点を線にする”作業が大切だと感じました。ただ、コスト面など企業特有の視点には十分に答えられず、課題を感じました。」と振り返りました。

両名とも、指導教員からの丁寧なフィードバックや説明の仕方の指導が大きな支えになったといいます。学会発表や産学連携の場への参加を教育の一環と捉える草場教授の方針が、学生の主体的な挑戦を後押しして、成長を促しています。



田中さん

学生目線での産学連携（続） — システム工学部 草場研究室インタビュー —



左から) 高原主任、中林コーディネーター、草場教授、大歳さん、田中さん

進路への影響

産学連携の経験は進路選択にも影響を与えています。

田中さんは、

「学術的研究を深めつつも、社会実装を意識した研究者でありたい。」と語ります。

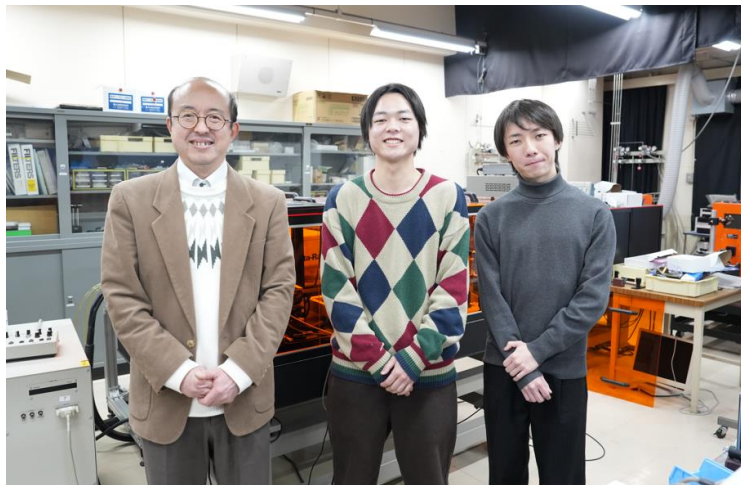
一方、大歳さんは、「学生でも価値を出せると実感できました。就職後は企業の立場から大学の研究成果をどのように製品へ活かせるかを考えていきたい。」と抱負を述べてくれました。

学生が考える“良い産学連携”とは

最後に、学生目線での産学連携について尋ねました。

田中さんは「外の場に出ることで自分の立ち位置を再確認できることが大切です。もっと企業と接する機会が増えれば、多様な視点を持てるようになると思います。」と話します。

大歳さんは、「私たち学生が受け身にならないことが重要です。挑戦の機会はあるので、失敗を恐れず主体的に関わってほしい」と後輩へエールを送りました。



左から) 草場教授、大歳さん、田中さん

本取材記事の内容は、本日午正午に企画・広報課よりプレスリリースとして発表されました
<https://www.u-presscenter.jp/article/121435>

【コーディネーターより】 今回のインタビューを通じて浮かび上がったのは、産学連携が単なる研究成果の発信にとどまらず、学生の成長を促す“教育の場”として機能している姿です。理論と実用を結ぶ経験、専門性をわかりやすく伝える力、社会との接点の中で得た自信。学生の言葉から、産学連携の新たな価値が明確に見えてきました。今後も学生の声に耳を傾けながら、より実りある産学連携の形を模索していきたいと考えています。



取材・文：中林太美世（産学連携コーディネーター）
写真：企画・広報課